2 資産に含まれる文化財

① 整理表

区分	名　称	概　要
覆下栽培における茶生産の展開	**宇治市域の宇治茶生産の景観** 中宇治、白川 ※一部、文化財保護法による重要文化的景観に選定	・てん茶（抹茶）及び玉露など、茶畑に覆いをかけて栽培する覆下茶園による茶栽培をおこなう茶畑が点在するとともに、室町時代末期以来の歴史を誇る茶問屋が建ち並ぶ地である。 ・宇治では鎌倉時代から茶が栽培されており、16世紀後半より覆下栽培が開発され、白川の砂質土壌の地で伝統的な本簀及び寒冷紗による覆下茶園が営まれている。中宇治には、抹茶などの高級茶の製造と販売を独占した宇治茶師の屋敷をはじめとする茶問屋の町並みが残る。 ・宇治市域には、宇治茶の歴史が、宇治川を中心として形成された風土の中に体現され、文化的景観のまとまりが形成されている ・評価基準（iii）（iv）（v）（vi）を示す代表事例。
	城陽市域の宇治茶生産の景観 上津屋	・17世紀中期には城陽市内に茶園があったことが確認されている。 ・上津屋地区は、現在「てん茶（抹茶）」の産地として知られる。19世紀以降、覆下栽培が木津川河川敷に拡大したが、本地区はその典型例である。河川敷の平坦な砂地を利用し、伝統的な本簀及び寒冷紗による覆下茶園で生産されるお茶は、松のような濃い緑をもつ独特のお茶となる。 ・河川敷近くの集落内には茶工場建築物も点在し、自然（河川）と生業、生活が密接に関連する文化的景観のまとまりが形成されている。 ・評価基準（iii）（iv）（v）（vi）を示す代表事例。
	京田辺市域の宇治茶生産の景観 飯岡	・飯岡地区は玉露産地として知られる。 ・木津川左岸の独立丘陵に集落が立地し、丘陵周辺の低地には水田と畑地が、丘陵には集落と覆下栽培の茶園、そして竹林が広がっている。集落内には茶工場建造物も点在する。河川と平地、丘陵といった地形の違いをうまく利用した土地利用が展開している。 ・また、丘陵頂部には京都府南部の山城地域を代表する古墳が位置しているなど自然・歴史・生業の各側面で特徴的な要素を備えており、小規模ながら明瞭な文化的景観のまとまりが形成されている。 ・評価基準（iii）（iv）（v）（vi）を示す代表事例。
露地栽培における茶生産の展開	**宇治田原町域の宇治茶生産の景観** 湯屋谷、奥山田、郷之口	・宇治茶の煎茶生産史上の核をなす地域である。 ・奥山田、湯屋谷は、鷲峰山北麓の谷筋に展開する集落で、奥山田大福谷で鎌倉時代初期に茶栽培が始められたと言われ、湯屋谷では永谷宗円によって青製煎茶製法が開発された。宗円は江戸への販路開拓も成し遂げたため、谷深い地ながら茶農家だけでなく茶問屋も軒を連ねる集落形態が生まれた。 ・茶園は谷沿いの水田脇に設けられた原形というべき茶園景観にはじまり、戦後には大福に大規模な山なり茶園が開かれ、寒暖の差の大きい気候を活かした香りのよい煎茶が生産されている。 ・また、郷之口は、陸上及び水上交通の結節点に発達した茶問屋街で、間口の狭い町家形式を持つ明治以降の茶問屋が建ち並ぶ。 ・自然条件を活かしつつ、生産と流通に独特の個性を持つ、文化的景観としてのまとまりが形成されている。 ・評価基準（iii）（iv）（v）（vi）を示す代表事例。

評価基準

（iii） 文化的伝統や文明の存在を伝承する証拠で希有な存在：「緑茶生産の伝統と革新の歴史」
（iv） 歴史上の重要な段階を物語る景観の類型：「日本茶生産の景観の類型」
（v） ある文化を特徴づける土地利用形態の見本：「日本茶生産を特徴づける土地利用」
（vi） 人類の歴史上の顕著な普遍的意義を有する出来事や伝統、思想、信仰、芸術との関連：「国民諸階層を対象とした緑茶の喫茶文化の形成に大きく寄与」

区分	名　称	概　要
露地栽培における茶生産の展開	**和束町域の宇治茶生産の景観** 原山（はらやま）、釜塚（かまつか）、石寺（いしてら）、撰原（えりはら）、湯船（ゆふね）	・和束町は、現在、京都府内でもっとも茶生産量が多く、京都府を代表する茶生産地である。 ・鎌倉時代に鷲峰山（じゅうぶさん）山麓に茶を栽培したのが始まりと言われ、16世紀後期には、原山に茶園を開いた記録や宇治製法が開発されてから約10年後に原山に伝えられたとあるなど、古くからの煎茶産地である。 ・明治以降、集落裏側の山腹を山なりに開墾するなかで一大産地へと展開していった。なかでも、原山・釜塚・石寺、撰原の各地区では、集落と茶園の織りなす良好な文化的景観がみられ、京都府の文化的景観に選定されている。 ・湯船は、茶工場は住居施設を２階に付設するなど独特の外観と建築構成を示し、規模も大きく集落景観において重要な位置をしめている。しかも、茶工場に加え、茶畑での農作業に不可欠な雪隠（せっちん）や風呂場、あるいは井戸（いど）屋形（やかた）などが屋敷の周囲に配置されていることも、集落景観を特有のものにしている。 ・湯船地区は、伝統的民家に加え茶工場が多く残り、宇治茶の生産集落としての特徴をよく示し、宇治茶の生産集落を代表する地区として価値が高い。 ・評価基準（iii）（iv）（v）（vi）を示す代表事例。
	南山城村域の宇治茶生産の景観 田山（たやま）、高尾（たかお）、童仙房（どうせんぼう）	・木津川水運を背景に、幕末からの煎茶の輸出を契機として、茶園を徐々に拡大してきた生産地である。 ・村の南半に所在する田山、高尾では、縦畝の茶園景観が際立つ。山中に山なりに開墾された緩勾配の茶園　が点在し、それらを縫うように畝が縦断する様は、宇治茶生産の景観中でも特筆すべき眺めである。縦畝は乗用型摘採機の導入にも適しており、生産の合理化と伝統的な景観とが両立してもいる。 ・また、童仙房は標高500ｍの山間の平坦地に明治初期に開墾された集落で、水田と山なり茶園が対をなす、素朴な景観が残る。 ・明治以降における宇治茶生産の歴史と独特の風土が織りなす文化的景観のまとまりが形成されている。 ・評価基準（iii）（iv）（v）（vi）を示す代表事例。
	木津川市域の宇治茶生産の景観 上狛（かみこま）	・上狛には、木津川水運を利用した交通の結節点である地の利を活かした茶問屋街が形成されている。 ・綿業を商っていた家々が、幕末からの煎茶の輸出拡大にともない、順次茶問屋へと転換し、発展したもので、奈良街道に沿って広い間口を有する茶問屋が建ち並ぶ通り景観を見せる。 ・現存する茶問屋の建物は、幕末建設のものから、販路が国内向けとなった大正、昭和初期に建設されたものまで多様に残る。広い間口を活かして長屋門を構え、中央の庭を茶工場と主屋が囲む、明治以降に発展した茶問屋らしい合理的な配置をみせる。 ・自然、歴史、生業に特徴的な要素を備え、文化的景観のまとまりが形成されている。 ・評価基準（iii）（v）（vi）を示す代表事例。

② 構成要素ごとの位置図と写真

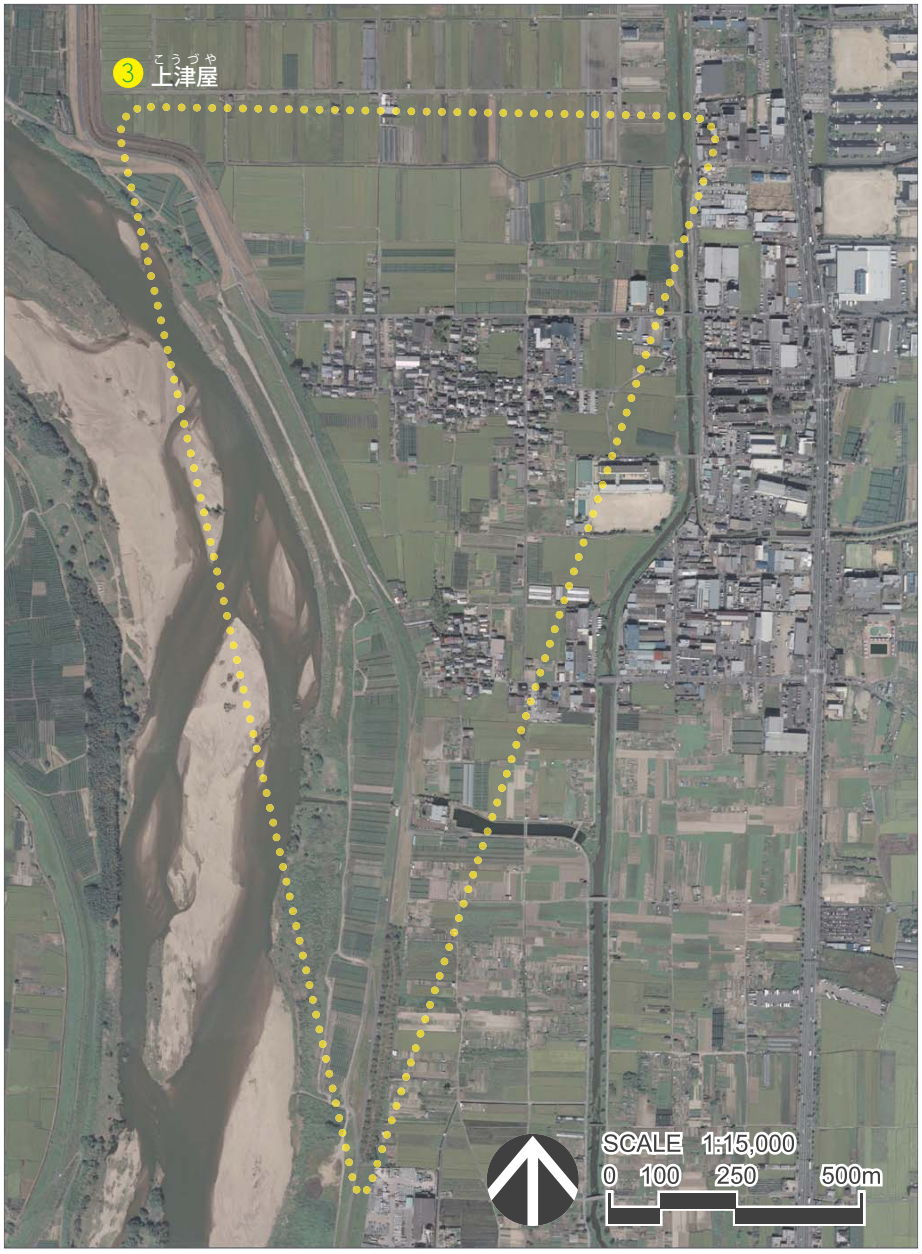
宇治市域の宇治茶生産の景観　中宇治（なかうじ）、白川（しらかわ）

① 中宇治（なかうじ）

② 白川（しらかわ）

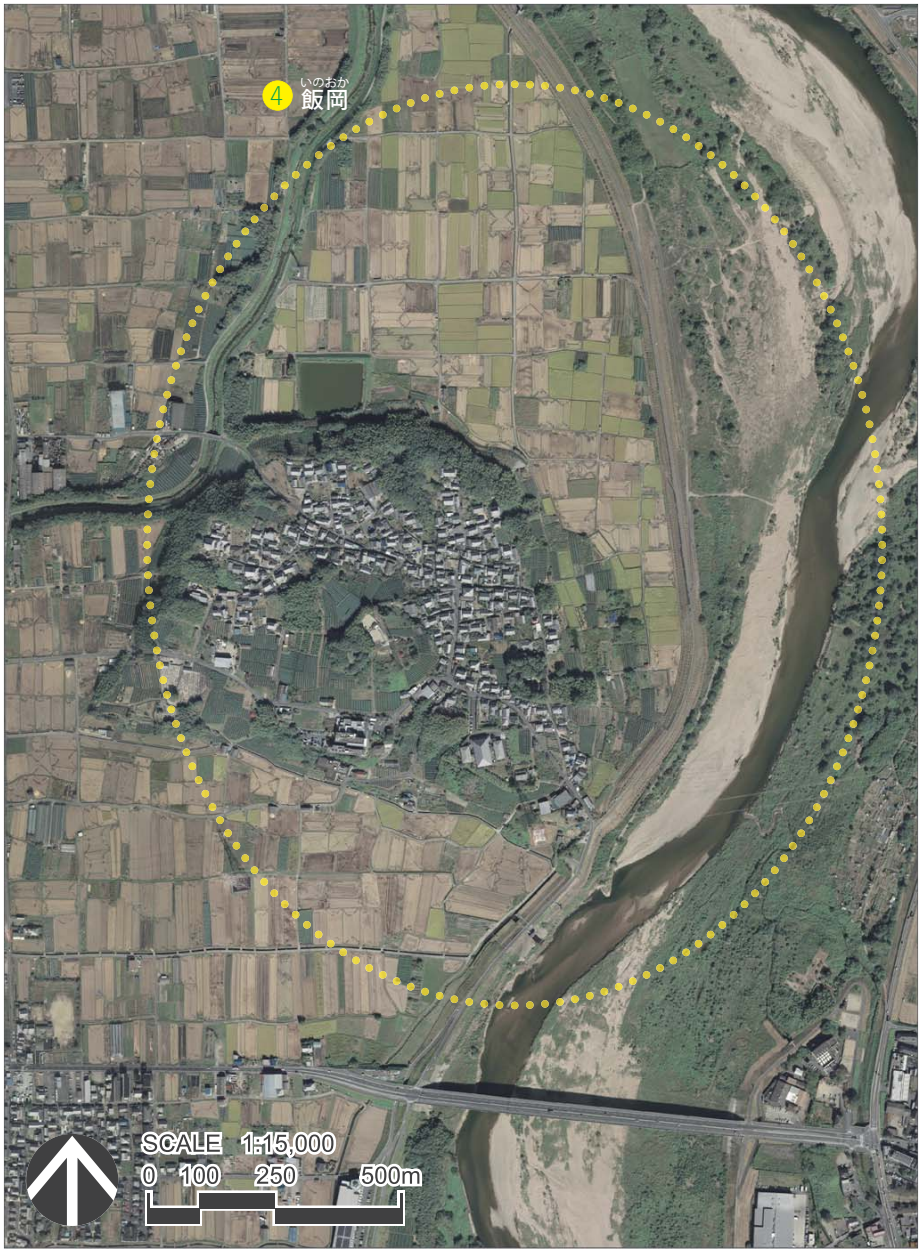
城陽市域の宇治茶生産の景観　上津屋（こうづや）

③ 上津屋（こうづや）



京田辺市域の宇治茶生産の景観　飯岡（いのおか）

④ 飯岡（いのおか）

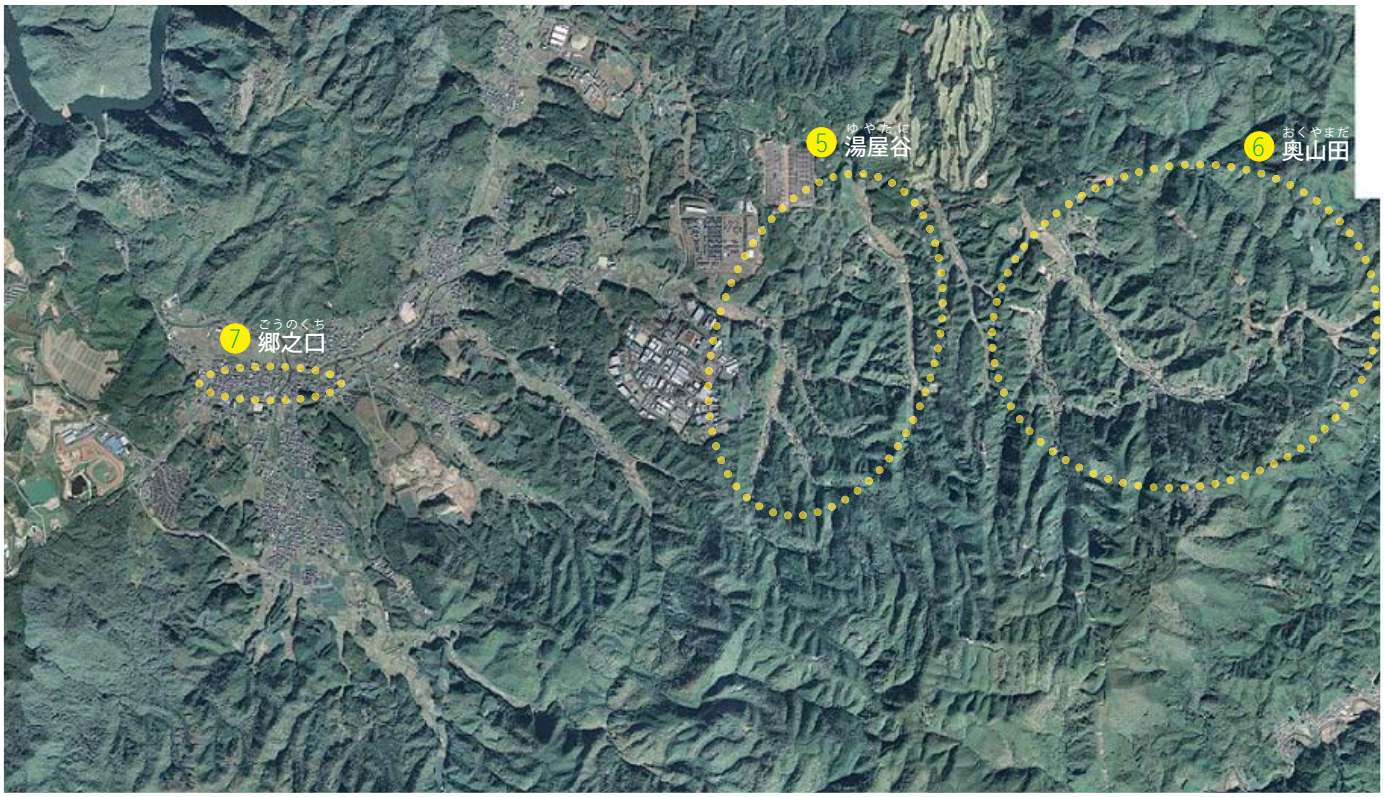


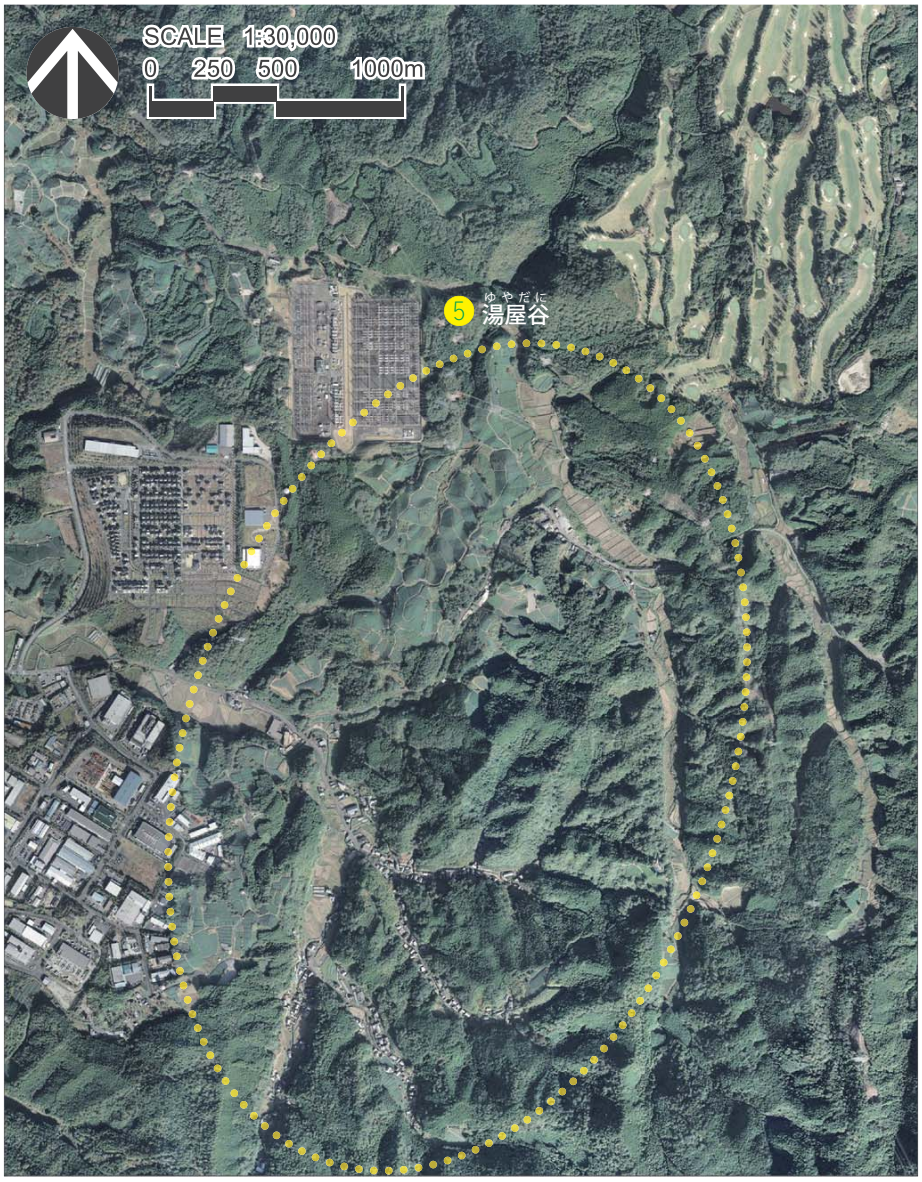
宇治田原町域の宇治茶生産の景観　湯屋谷（ゆやだに）、奥山田（おくやまだ）、郷之口（ごうのくち）

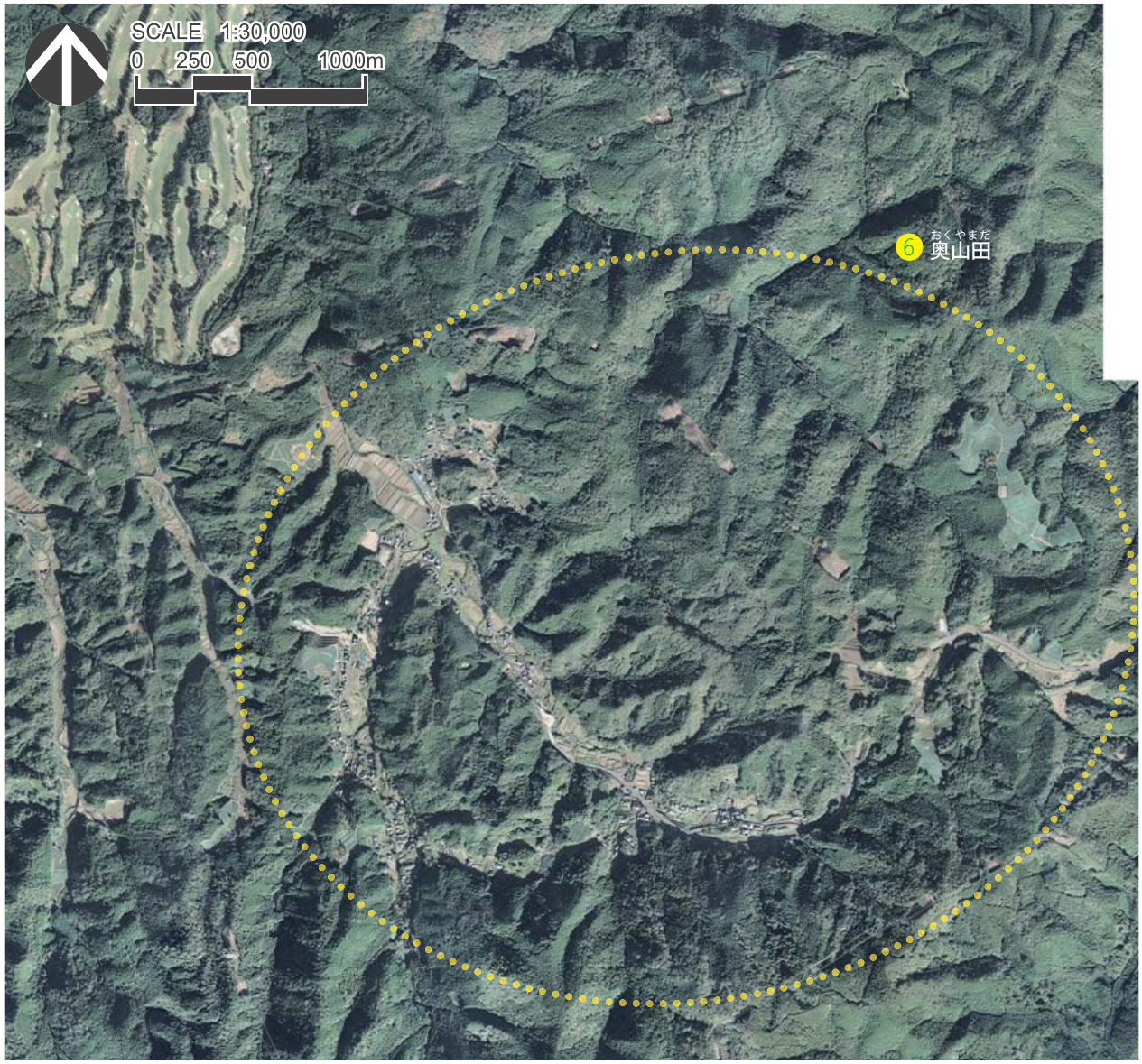
⑤ 湯屋谷（ゆやだに）

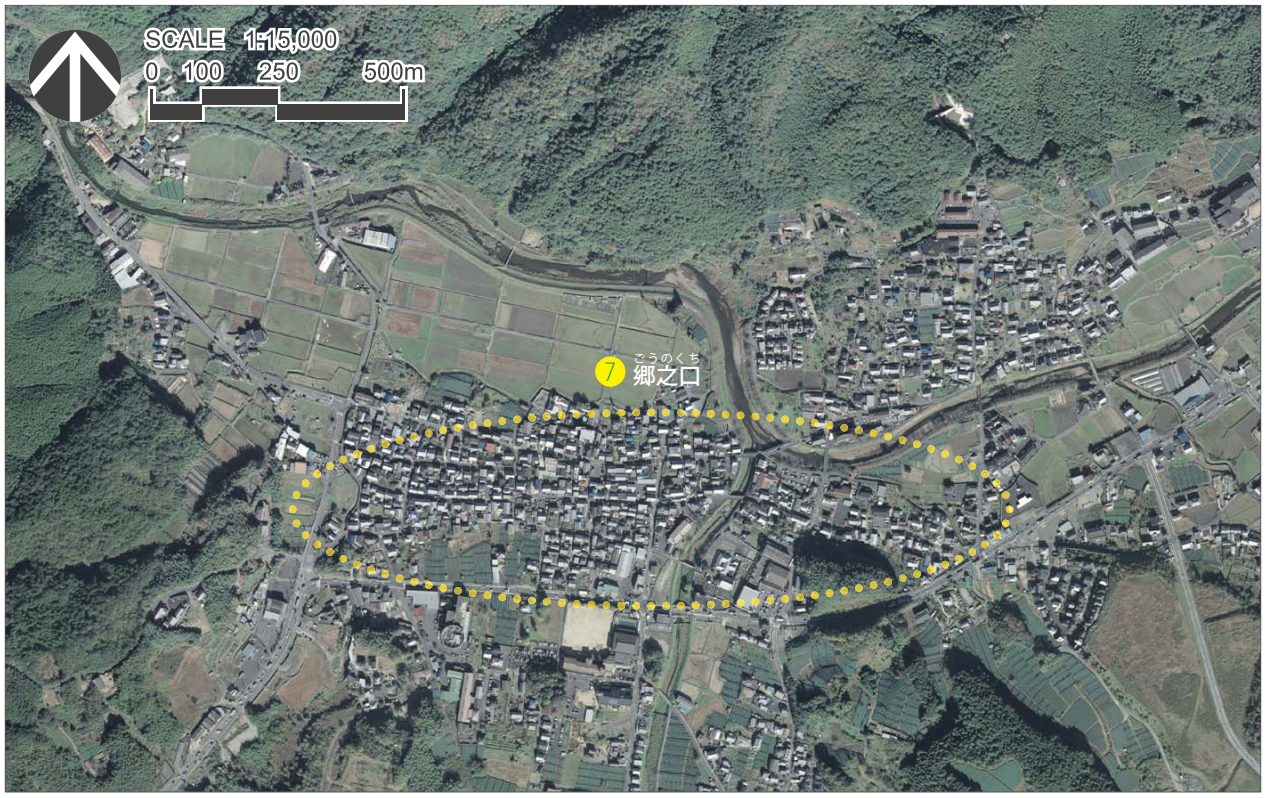
⑥ 奥山田（おくやまだ）

⑦ 郷之口（ごうのくち）


5 湯屋谷
6 奥山田
7 郷之口


SCALE 1:30,000
0 250 500 1000m
5 湯屋谷


SCALE 1:30,000
0 250 500 1000m
6 おくやまだ 奥山田


SCALE 1:15,000
0 100 250 500m
7 ごうのくち 郷之口